

「清紫会」だより

- ◆第173回 平成三十年十一月十五日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二  
〈提出作品〉市川茂子・銭湯の賑わい／林博子・ピッピッピッ
- ◆第174回 十二月二十日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二  
〈提出作品〉小野澤繁雄・大字柏崎／林博子・黄昏まで／松井淑子・名古屋行き
- ◆第175回 平成三十一年一月十七日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二  
〈提出作品〉市川茂子・年越しのハプニング／林博子・門松たてて

無二の会短信

◆九死に一生を得たということであろうか。平成三十年は、入院、手術、治療で過ぎた半年であり、あとの半年は三人のヘルパーさんの交替介護のおかげで何とか生きていられたという情況だった。就労ならぬ、自由のきかない、まるで「収牢」とでもいうような毎日が続いた。でも二十年には、父の妹の糸子、親類の順子叔母、そして糖尿病だった母の三人が次々に七十九歳である世に旅立ち、あまりに突然だったので、意外の気持でいただけだった。母たちよりも一年長生きをしたのだからと感謝しながら、自分は悔いを残さないようにと覚悟を決めていた。終活として、老人会の役の引き継ぎや年賀状の準備に忙しい年末をおくり、夜も遅くまで頑張っていた。が、ついに翌三十年三月初めに体調をくずして緊急事態が訪れた。入院、検査の結果、右前頭部に腫瘍があり、頭蓋骨と脳の間の水疱のようなものがあるので切除することになって、病名を聞くと「側頭部円蓋部異型髄膜腫」とのこと。六時間に及ぶ手術が終了して、気がついたのは薄暗いベッドの上だった。ナースコールのやたらに鳴っている、その騒々しい音を聞きながら目が覚め、ああ生きているのだと実感したのが、今でも蘇ってくる。

池田桂一